授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 1990 号

Capsule endoscopy after hematopoietic stem cell transplantation can predict transplant-related mortality

（同種造血幹細胞移植後に行うカプセル内視鏡で移植関連死亡を予測することができる）

居軒　和也（いのき　かずや）

博士（医学）

論文内容の要旨

同種造血幹細胞移植後に生じる致死的合併症のひとつである移植片対宿主病（graft-versus-host disease:GVHD）の消化管好発部位は小腸（回腸末端）とされる。同種造血幹細胞移植後に消化器症状が出現した際のカプセル内視鏡を用いた小腸観察の有用性を移植関連死亡に着目し検討した。

国立がん研究センター中央病院で 2009 年 3 月から 2017 年 2 月までに施行された同種造血幹細胞移植後に、小腸カプセル内視鏡が依頼された症例に関して、カプセル内視鏡で観察される小腸の炎症の有無および最終のカプセル内視鏡検査日から 2 か月以内の移植関連死亡について検討した。

検討期間中に小腸カプセル内視鏡が依頼されたのは 100 症例（153 検査）であった。嘔吐、胃内停滞などの理由で小腸の観察ができなかった症例を除いた 97 症例（145 検査）の患者背景は、男性 50 例、女性 47 例、平均年齢 54 歳であった。97 症例のうち小腸カプセル内視鏡で炎症所見を認めたのは 46 例でその内視鏡診断は GVHD（n=16）、サイトメガロウイルス腸炎（n=14）、GVHD およびサイトメガロウイルス腸炎合併例（n=16）であり、46 例中 12 例（26%）に移植関連死亡を認めた。一方、炎症所見を認めなかった 51 例中では移植関連死亡は 2 例（48%）のみであり、炎症所見を認めた場合は認めない場合と比べ有意に移植関連死亡が多かった。（26% vs 4%, $p<0.01$）同種造血幹細胞移植後に消化器症状が出現した際のカプセル内視鏡による小腸観察の有用性が示唆された。今後カプセル内視鏡で炎症を認めた症例への早期治療介入などの可能性が期待される。